
望まれぬ『外史』の男

長靴を履いた猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

望まれぬ『外史』の男

【Nコード】

N7148P

【作者名】

長靴を履いた猫

【あらすじ】

時は後漢王朝末期——世は荒れ果て乱世と呼ばれた時代であり、『外史』と呼ばれる世界。天の御使いである北郷一刀が望んだ世界。これは、そんな『外史』を生き抜こうと？き足掻く鬼子と呼ばれた男の話。

第一話

私がこの世に生を受け、生まれたのは奇跡であり悲劇だった。『母』は元々病弱で体が弱かったらしく、私を腹に宿してからも幾度も体調を崩していた。私の出産が近づくにつれ、非常に危険な状態に陥る事もあったらしい。そんな『母』は、私を産んだ・・・産んでしまったのだ——自分の命と引き換えに。

「おい、起きろ！」

怒鳴り声が聞こえ、私の意識が目覚める。ああ、また今日という日が始まるのか。私はまどろみから目覚める頭でそんな事を考える。

「起きろって言っているだろうが！」

「がつ・・・！」

その怒声と共に腹部に強い衝撃が走り、声にならない息が漏れる。目を開くと、私の『父』が憎しみの籠った表情で私を睨みつけていた。

「さつさと仕事に行け！今日は全部の仕事を終えるまで飯も休みも抜きだ！」

『父』の言葉に私は無言で頷き、フラフラと立ち上がる。

昨夜は雨が降ったせいか湿気が籠った黴臭い石牢の『家』。ボロ布のようにしか見えず、かろうじて服としての機能を果たしている服はその湿気のせいか濡れており、体に纏わりついて非常に気持ちが悪。

（・・・そういえば今日で飯を抜かれるの三日目かな。）

おぼつかない足取りで『家』を出る私に、『父』は後ろから蹴りを入れた。

「さつさと行け、この親殺しの鬼子が！」

飛びそうな意識の中、『父』の言葉が胸に突き刺さる。親殺しの鬼子。そう、私は鬼子。

『父』から愛する者を奪い、祖父母から大切な娘を奪い、家族から暖かな幸せを奪い、そして『母』を私自身から奪った鬼。何よりも忌み嫌われる存在で、誰よりも恨まれる存在。

（だから・・・。）

これは仕方ない事。私はそう結論付け、思考を打ち切る。

（これから仕事なのだ、余計な事を考えている暇などないし必要ない。）

私は壁伝いに立ち上がり、父の罵声を背に浴びながら石牢の『家』を後にした。

第一話（後書き）

作者は小説初心者です。

その為文章を難しく書いてしまう事が多々ありますので、ご指摘いただけると幸いです。

第二話

『家』から出た私の仕事は畑の耕作、山での山菜採り、狩り、『父』の食事の準備、そして村の者の慰み者となる事。

神か『母』かは知らないが余程私が嫌いなようで、私は母親似な面立ちをしているらしくそういった趣味の輩の慰み者となった。まあ、行為が終われば飯を貰えるのでマシなのだが。

「おい。」

野太い声が聞こえ、そちらへ振り向くと下卑た笑みを浮かべた村の男——そういった趣味の輩が立っていた。男は私の手を強引に掴み、森へと引き摺るような形で連れて行く。

「。。。。」

私は無表情のまま、男の後をついて行った。

・・・一刻ほど後、私は行為を終えた男から解放された。顔についた白く粘つく液体を拭い、近くに無造作に投げられた野菜と米を食べる。何も味付けされていないし、泥で汚れているが気にせず咀嚼し、嚥下する。食わなければ死ぬのだ、そんな細かい事をいちいち気にしている必要はない。

「んぐ・・・んぐ・・・。」

お世辞にも食事とは言えないが、三日振りの食事を食べ終える。これでしばらくは体を動かせるだろう。

私は立ち上がり、山菜採りと狩りの為に手頃な木の棒を探す。杖代わりにも、武器代わりにもなる棒が望ましい。となれば、ある程度の長さで硬さがなければならぬ。

「・・・ん、これでいいか。」

多少掬くれてはいるが十分だろう。何度か素振りをし、感触を確認する。

「よし、行くかな・・・。」

『父』の食事の仕度もせねばならぬのだ、急いで終えないと。

俺はあいつが憎い。妻を、詩葉しやうを殺したあいつが。

詩葉は体が弱かった、体調の悪い日など一日中家で過ごさねばならぬほどに。そんな詩葉を守ってやりたい、俺はいつしかそう思い、想いの丈を詩葉にぶちまけた。

そして、詩葉は俺を受け入れてくれた。詩葉と結ばれて、俺は幸せだった。今まで生きた中で、何よりも幸福な時間を過ごした。それと同時に、この平穏を崩したくないと強く願った。

——しかし、それは叶わなかった。詩葉が子を宿したと聞いた時、俺は喜ぶと同時に一抹の不安を抱いた。病弱な詩葉が子供を産むとなれば、それは体に大きな負担が掛かることを意味するのだ。……不安は的中し、詩葉の体調の変化は激しいものとなった。時に病を患ってしまい、苦痛を伴うこともあった。俺は彼女に墮胎するよう言った。

しかし、詩葉は首を振る。

『だって、私達の子なんだよ？私はこの子を産みたい。それに・・・私は、この子が立派な大人に育つまで死ぬつもりないわ。』

そう笑いながら言うのだ。額には苦痛のせいか大粒の汗が光っているのに、そう笑うのだ。俺も、義父母も彼女の事を出来る限り気遣った。

——だが、詩葉は死んでしまった。あいつを産んで、俺を残して。俺が弄ると少し怒りながらもどこか楽しそうな表情も、共に酒を飲み交わしていたときに見せた柔らかく温かみのある笑みも、もう、見れない。

「詩葉・・・。」

黴臭い石牢の部屋、忌々しいあいつが住む部屋を出る。年を経るごとに妻の、詩葉の面影を濃くしていくあいつ。それが俺を余計に苛立たせる。

詩葉の髪と同じ黒い髪、少し垂れ下がった瞳、柔和で儚げな面立ち。どれもこれもが詩葉の血を色濃く受け継いでいる。

「くそっ・・・くそっ、くそっ！」

何故だ、何故あいつが生きて詩葉がいないのだ。あの時、無理にでも産ませぬべきだった。その後悔だけが燻り、いつしかそれはあいつに対しての憎悪となっていた。他者から見れば八つ当たりかもしれない、だが俺にはそれしか残っていないのだ。

俺の生きる糧は、あいつを虐めて抜いて――産まれた事を後悔させることしか。

「・・・とにかく、家の義父の様子を見に行くか。」

俺は詩葉を失ってから一時錯乱状態に陥ってしまった義父母の面倒を見ている。あいつを行かせないのは、あいつを見た義父母が再び錯乱するのを防ぐ為だ。錯乱した上、あいつを殺されたなんていう事があるてはならないのだ。あいつはもっともつと一苦しめなくちゃならない《・・・・・・・・・・・・・・・・》。一苦しめなくてはならないんだ《・・・・・・・・・・・・・・・・》。

「くくくくく・・・・・・・・！」

歪んだ笑みを浮かべ狂人のように俺は山の麓にある石牢から村まで、あいつを苦しめる方法を考えながら歩くことにした。

S i d e o u t

「ふう・・・このくらいかな。」

私は息を吐き狩りを終える。殺した2羽の兎の耳を手に持ち、私は踵を返し村へ帰る。

「ん・・・？あれ・・・は・・・？」

私は村の様子がおかしい事に気づく。黒煙が上がっているのだ、一軒や二軒どころの話ではなく、村の至る所から。

（まさか・・・。）

私は兎を放り投げ、駆け出す。頭によぎった嫌な予想を否定しながら。

「・・・っ。」

だが、頭によぎった嫌な予想は現実となった。轟々と燃える村、犯されたのであろう裸の娘、四肢を切り取られ血溜りに倒れ伏す男、喉から腹にかけて切り裂かれた子供、生きたまま焼かれたであろう老人と思しき姿。

全てが赤く染まっていた。吐き気が込み上げてくる。今まで獣を捌くことは何度もあった、血の臭いも嗅いだ。しかし、これは次元が違う。村全体が血の臭いで、死の臭いで充満している。

「う……げっ……あ！」

先程食べた三日振りの食事が吐き出される。飲み込もうとするが、それに体は答えなかった。尋常じゃないほどの汗が流れ、心臓は早鐘を打つかのように鳴り響く。

一刻も早くここを立ち去りたいという思いがあるのに、足は地面に縫いつけられたかのように動く事を頑なに拒む。

「はっ……はっ……！」

目の前の視界が歪み、今本当に自分は立っているのだろうかと思うほど地面が近く感じる。

（そういえば、『父』……は？）

ふと、『父』の事を思い出す。確か今の時間帯は、祖父母の元へ行っているはずだ。

「行……かなきゃ……！」

目の前の光景に疎んで動かない足を叩き、喝を入れる。何度か繰り返し、ようやく動くようになった。気を緩めればそのまま崩れ落ちそうな程覚束ない足取りで、祖父母の家を私は目指した。

第二話（後書き）

追記：Side『父』の部分を改稿させて頂きました。

第三話

「はあっ・・・はあっ・・・！」

壁に手を添えながら、鉛のように重い足を引き摺って祖父母の家を目指す。そこまで大きな村ではないはずなのに、今の私にはとてつもなく広く感じられる。

「着いた・・・。」

ようやく祖父母の家に着いた私は火の勢いが少し弱まった場所から祖父母の家に入る。

「熱っ・・・けほっけほっ！」

熱風と黒煙のせいで咽てしまい思わず咳き込むが、それでも煙で痛み目を開きながら家の中を探す。近くにあった戸を開ける。

「っお爺様、お婆・・・あ・・・！」

祖父母の二人は折り重なるように死んでいた。そして、その近くに力無く横たわる『父』がいた。『父』の首からは傍目からでも分かる致死量の血が流れ出ており・・・その顔は白く、まるで化粧をしたかのようなだった。

「嘘・・・だ。」

口から小さくその言葉が漏れる。

「嘘だ、嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ！・・・！」

狂ったかのように同じ言葉を紡ぐ。目の前の光景を否定するように認めたくなかった、確かに私を虐待していたのは『父』だ。だが、それでも『父』なのだ。例えば鬼子と罵られようと、殴られ骨が折れようと——私のたった一人の、愛する『父』なのだ。

（なのに・・・なんで。）

何で——涙が出ない。それどころか、私の胸中に渦巻くものは悲しみとは全く違うモノだった。

「嘘だ。」

先程と同じ言葉。しかし、否定するものは違っていた。否定するものの、それは私の胸中に渦巻いているのは——歓喜だったのだから。

「……だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ！……！」

最早絶叫と呼んで差支えないほどだった。そして、自分自身に呪詛を呟きながら私の意識は目の前の光景に、私自身の感情に耐えきれずに闇に沈んだ。

「う……。。」

呻き声を上げ、私は薄っすらと目を開く。目に映ったのは、燃えた天井の梁ではなく見知らぬ女性の顔だった。

あの時村で見た燃える家と同じように赤い髪を背中まで伸ばし、綺麗な面立ちは、街ですれ違えばおそらく多くの男性が振り向くほどだ。

「あら、起きたかしら？」

女性は私が起きた事に気付き、声をかけてきた。私は起き上がるのを拒もうとする体に鞭打ち、上半身を起こす。

「あなた・・・は？」

煙を吸いすぎたせいか、声がかすれている。

「私はここ、蜀を治めている劉焉というわ。賊共が近頃領内に現れ始めたと聞いて、急いで軍を編成してきたのだけれど・・・ごめんなさい。間に合わなかったわ・・・。」

劉焉はそう言って私に頭を下げた。

「もっと早く来ていれば・・・村の者達を助ける事が出来たのに――」

ギリッ、と齒軋りが聞こえた。手を強く握りしめすぎたせいか、血が垂れてきている。おそらく助ける事が出来なかった事に責任を感じているのだろう。そのような責任、感じる必要も無いのに。

私はポタリ、ポタリと床に滴り落ちる血をボンヤリと見やりながら
そう考える。

「他の者は、助かりませんでしたか。」

口を開くと、自分でも驚くほど平坦で感情の無い声が出た。

「っ・・・ええ、あなた以外は、皆・・・。」

その声に少し驚きながら劉焉は答える。

「そう、ですか。・・・すみませんが、しばらく一人にしていただけ
ませんか？」

「あ、そうね・・・。また後で来ることにするわ。」

申し訳なさそうにそう言って席を立ち、天幕を出る劉焉に頭を下げる。

「・・・。」

劉焉が出て行ったあと、私は一人天幕の中で考えていた。『父』は、

祖父母は、村の者は死んだ。そして私の胸中に渦巻くのは歓喜……いや狂喜だろうか？劉焉より村の者が全員聞かされたと聞いた時も、『父』の時と同じようにその感情だけが私の心を支配した。

「くくく……。」

壊れている。親が死んで喜ぶなど、人としてあつてはならないだろう。喜ぶとしたら、壊れている人間が、鬼くらいのものだろう。

「いや、私の場合は……そのどちらもだろうな。」

産まれたときから呪われた鬼子と言われた。『父』の死を見たとき、私に残った人の心は完全に壊れたのだろう。故に、『父』の死を喜ぶなどという思考を持つのだ。

「まあ、いずれにせよ……ここで『私』は死んだ。」

私の中の人の心が砕け、壊れてしまった以上ここにいる私は『私』ではない。

「なれば此処に残るは壊れた『私』という存在を掻き集めて出来た鬼子。」

どんなに掻き集めて、繋ぎ直してもそれは決して元の姿ではない。

「故に新たな名を、自ら付けようか。『私』が私となる為に。」

目を瞑り、しばし黙考する。

「・・・決めた。性を呂、名を瓊、字を白文。真名は——鬼子に付けるにはおこがましかろう?。」

誰が答えるわけでもないのに、私は誰かに問うかのようにそう言葉を紡ぐ。そしてしばらくの間、壊れた鬼子の小さな笑い声が天幕の中静かに響いていた。

第三話（後書き）

ようやく主人公の名前が出せました。

補足

主人公の年齢は推定12歳前後。

何故推定なのかは親が呂瓊に年齢を一切教えなかったのに加え、呂瓊自身大してその事を気にする必要が無かった為です。

第四話

「失礼するわよ。」

その言葉と共に、劉焉が天幕へ入ってくる。

「劉焉様。」

「どう、気分は？」

「ええ・・・もう、大丈夫です。」

その言葉を聞き、劉焉は安堵したのかホッと息をつく。そんな安堵するようないことはないので、と私はそう思う。

「——ねえ、君。君は、あの村以外で親戚とかいない？」

突如、劉焉は私にそう聞いてきた。おそらく、村の生き残りである私に親戚がいればそこに預けるべきと判断したのである。だが、それは無理だ。

「・・・残念ながら、存じません。」

そう、私はあの村の者以外を知らなかったから。あの村で育ち、せいぜい外に出るとしたら山の中だ。親戚など、いるかどうかすら知らないし——そもそも、私の存在自体親戚に伝わっているかどうかすらあやしい。

「そう・・・。じゃあさ——。」

劉焉は自身の顔に指を向ける。

「私のところに、来ない？」

「・・・。」

一瞬、思考が停止した。この人は何を言っているのだ？確かに私は身寄りがない。が、それならばどこか他の村か街にでも置いて行けばいいはず。幾ら自身に責任を感じているとはいえ、そこまでする義務など無いはず。

「——何故、です？村の者が助からなかったのは事実ですが、この時代それは仕方のない事です。・・・あなたがそこまでする理由が分かりません。」

私はその疑問を率直に彼女、劉焉に問う。劉焉は困ったように頬を掻く。

「・・・君ってさ、私に・・・いや蜀にとって必要と・・・そんな風に感じるのよ。私の勘なんだけど・・・ね？」

「私は学もなく、武も習っていない村民ですよ？そんな私が太守である劉焉様の御目に叶うと思いませんが・・・。」

そう、私は学などないし武術など習ったことすらない。そのような事をしている暇があったら、仕事をしていた。

「うーん・・・？」

どうやら、劉焉自身そこまで分かっているようだ。うんうんと唸って、何とか自分の勘を言語に変換しようとするがどうも曖昧で私にはよく伝わらない。

（・・・単に憐みからの同情からではないようですね。）

単の同情からであれば断るつもりだった。身寄りなく、力の無い今の私に生きる術は無いが、それでも単に憐みからの同情だけは嫌だ

った。それを受けるくらいであれば、死を選ぶ。鬼が人から情けを受け、生き延びるなど笑えない。

（だが・・・。）

「それで、どう・・・かしら？」

劉焉がこちらを見つめてくる。その瞳は断られるのではないかと、不安で揺らいでいる。

「・・・分かりました、その話有難くお受けしたいと思います。」

鬼子である私を欲すのであれば、私はそれに応えたい。

私はそう言つて深々と頭を下げる。頭を上げると、喜色の笑みを浮かべた劉焉様が手を差し出す。

「それじゃ、よろしくね？えっと・・・。」

ああ、そういえば名前は一方的に教えられただけでしたね。

「私は性は呂、名は瓊、字は白文と申します。残念ながら本来預けるべき真名は私にはありません。呼び方は何なりとお呼びください。」

「

「そう、それじゃよろしくね呂瓊。それじゃ、私の真名をあなたに――。」

劉焉様がそう言ったところで、私は手を出してそれを制した。

「無礼を承知で申し上げます・・・私はまだあなたの真名を預かる資格も覚悟もございません。私が蜀の為に働き――私に真に真名を授けてもいいと思う時まで、真名はあなたの胸に納めておいてくだりませんか？」

これはお願いでしかない。真名は自分がその者に命を預けても構わないと信頼出来るほどの人間でないといけない。勿論、預けられる側もそれだけの信頼をおかれるのだ。それ相応の覚悟を持つ必要がある。今の私にはそのどちらもない。
・・・それでも、今この場で授けるのであれば私にはそれを拒むことは出来ないが。

「・・・そう、ならそうすることにするわね。」

少し残念そうだが、私の思いを汲んでくれたのか引きさがってくれた。

「ありがとうございます、劉焉様。」

「いいのいいの、真名ってそう簡単に授けるべきじゃないものね。預ける側も、預けられる側もそれだけの覚悟と信頼がいるってことを思い出させてくれたし。私も軽率だったわ、ごめんなさいね。」

そう言って頭を下げる劉焉。

「いえ、私の方こそ・・・預けると言ってくださったのに断ってしまつて申し訳ありません。」

「お話し中失礼します劉焉様、出立の準備が整いました。」

天幕の外で兵士の声が聞こえた。

「そう、それでは出立するとしましょう。呂瓊、あなた馬には乗れる？」

「いえ、恥ずかしながら一度も乗った事がないのでおそらく無理です。」

「それじゃあ馬の扱いに慣れてる部下をつけるから、共に乗りなさい。」

「はい。」

体はまだ重いが、それでも動く事にはそこまで支障はない。私は劉焉の後ろについて天幕を出た。

こうして私、呂瓊白文は蜀の太守劉焉君朗・・・後にその末子である劉璋季玉の下——この『外史』の表舞台に立つこととなる。

第四話（後書き）

少々展開が強引過ぎたかな・・・？
語彙の少なさと、文章構成の下手さがかなり目立つなあ・・・。

補足

呂瓊は独特の価値観があります。

情けで生かされるのは最大の屈辱と感じており、その情けを受けるくらいであれば死を選びます。

ただ、今まで自分の存在が否定されてきたようなものですので『必要となる』という風に勘で感じ取った劉焉に対して『それに応えたい』と思い、劉焉の下で過ごすことを決めました。

・・・何か自分で言って分からなくなってきた。

第五話

蜀の太守、劉焉様に拾われてから数年が経った。この数年で学に関しては才があつたのか成長を見込めたが、武に関してはからっきし駄目だと分かった。

「ねー呂瓊ー、街で遊ぼうよー！」

そして先程から兵法書を読んでいる私の袖を引っ張っている少女。彼女の名は劉璋季玉、私を拾ってくださった劉焉様の末子である。私と年が近かったこともあるのか、劉焉様がまず最初に会わせたのがこの方だ。母親譲りの赤い髪を劉焉様と同じくらいに伸ばし、まだ幼さとあどけなさが残る顔だがあと数年もすればかなり美女になるのは間違いないだろう。

「……まあ、性格が無邪気というか。元気があり余るのは良いんですがね？」

「……劉璋様？私は今勉学中なのですが。それに、劉璋様も今の時間帯は黄権様と勉強の授業のはずですが？」

淡々と私がそう言うと、劉璋様は言葉に詰まる。そう、この娘は勉強というものが大の苦手なのかいつも勉学の時間に逃げようとするのだ。特に黄権様の授業を。基本的に見つかって説教されているが。

今の私の立場は文官兼軍師見習い、そして劉璋様のお付きだ。その為、基本的には劉璋様に従わなくてはならないのだが・・・劉焉様からは『もし勉強から逃げようとするのを見かけたら・・・捕まえて私の所まで連れてきてね？お仕置きするから。』と言われている。

「う・・・きよ、今日は休みなの！」

明らかにバレバレなのだが、それでも誤魔化そうとする。

（まあ、黄権様は厳しいお方ですからねえ・・・。）

黄権様はここ蜀の筆頭軍師であり、私の師でもある。既に60近い御歳の老人だが、その眼光は未だ衰えを知らず蜀の地を侵そうとする五胡や南蛮に目を光らせている。

ただその性格は他者に対しても自己に対しても厳しく、誰かを叱責をすることがよくある。また奇襲や罠を仕掛けるの得意とする。そのせいで正々堂々を誇りとする武官等に嫌われている。まあ、優秀であるし叱責自体はきちんと筋が通っているので劉焉様や私を含む文官には慕われているが。

「はぁ・・・今頃黄権様が抜け出したのがバレてお探しになられていると思いますよ？」

黄権様は確かに厳しいが、同時に劉璋様の事を孫同然に思っている。

劉璋様がもし、ここ蜀を治める次代の太守でなければそこまで厳しくしなかつたろう。だが、現実が違う。彼女、劉璋様はいずれこの地を治めなければならぬ——例えそれが嫌であっても、だ。もし上に立つ者が何も出来ずにいれば蜀の地は荒れることになる。そうなれば傷つくのは民であるし、劉璋様自身である。だからこそ、黄權様はあえて嫌われるのを、疎まれるのを承知の上で劉璋様に厳しく接し学を教えているのだ。

「あの方も劉璋様に立派な君主になつてもらいたいからこそ、勉強を教えているのですから……。」

「う……。」

劉璋様がうろたえる。

劉璋様は頭が悪いわけではない、むしろ聡明なほうだ。それに人の心の機微に関して非常に鋭い。黄權様が自身の為を想って教えているのは分かつているのだろう。だが、同年の子のように遊びたいという気持ちもまた彼女の気持ちの一つなのだ。

「……では、こうしましょう。私は黄權様の処へ行つて、一刻程劉璋様が街に出かけていいよう頼みます。」

「え！」

劉璋様は驚きの表情のあと『本当に？』と聞いてくる。私が頷くと、彼女は嬉しそうに顔を綻ばせる。

そんな様子を見ていた私は『しかし』、と付け加える。

「ちゃんと、黄権様に謝る事。そうすれば私からは何も言いませんから。」

劉璋様は頷き、部屋から出ていく。

「・・・さて、私も黄権様の処へ行くとしましょう。」

劉璋様の後を追うように私は読みかけの兵法書を机に置いて部屋を出て行った。

「黄権様。」

私は劉璋様と共に城の中庭にいた黄権様を見つけ、声をかける。

「おお、呂瓊……に劉璋様。」

「う……お、黄権。」

私の姿を見た黄権様は皺は深く刻まれた顔に笑みを浮かべるが、劉璋様を見るや否や厳しい顔つきに変わる。

「何処に行っておられたのですか、劉璋様！」

怒声。本当に老人と疑うかのような、腹の底まで響き渡る声の中庭中に響く。

「えっと、その、ね。」

その声に気圧されたのか、劉璋様の言葉はたどたどしい。

「言い訳など聞くに値もせぬものです！さあ、早くお部屋にお戻りください。先程までの空白の時間分、勉学の時間に割り当てますぞ。」

そう言って劉璋様の手首を掴み、無理矢理連れて行くとする。

「え、あ……う。」

劉璋様は既に涙目で言葉も出てきていない。さて、このままでは劉璋様は黄権様に連れて行かれますし止めるとしましょうか。

「お待ちください、黄権様。」

私の平坦で、感情のない声を出す。黄権様が立ち止り、こちらを向く。

「劉璋様の事でお話が。」

「……何じゃ？」

黄権様は目を細め、元々鋭い眼光が更に鋭くなる。

「一刻程、劉璋様に暇を頂きたいのです。」

「駄目じゃ、一刻も時間があればより多く学べる。劉璋様には早く一人前になってもらわんと困るのじゃぞ？お前にもそれくらい分かっておろう。」

即答で答える黄権様。だが、私も劉璋様に約束した手前退くわけにはいかない。

「確かに仰る通りでございます。ですが劉璋様とて人の子、いつもいつも勉強ばかりしては身がもちませぬ。」

「時折武術の訓練や遊んでいるではないか。」

「多少の気分転換にはなるでしょう、がしかしそれを行うのは城の中です。時には街にて遊びたいという気持ちを持っても不思議ではありません。」

そう、何もかもを城の中。劉璋様が城の外に出れることは滅多になかった。あるとしたら月に一度の視察の際に母親である劉焉様に頼んだ時くらいだ。あとは延々と同じ一日を過ごすのだ。

「……。」

「……黄権様を含め、誰もが劉璋様に立派になってもらいたいと思っているのは知っております。ですが、余りに根を詰めてしまつては出来ることも出来なくなってしまう。」

『ですから、一刻程で構いません。どうか暇を。』そう言って私は頭を下げる。

しばしの沈黙が両者の間に流れる。

「・・・・・・・・ふう、頭を上げよ呂瓊。」

先程までの硬い声色ではなく、優しい声色。

「そうじゃったな、どんな者でも根を詰めれば出来ることも出来ない。儂も老いたものじゃ・・・、劉璋様の気持ちも辛さも考えずただただ無理矢理立派な君主にさせようとしていたとは。」

自嘲気味に笑う黄権様。そして劉璋様に向き直り。

「申し訳ありません、劉璋様。劉璋様の気持ちを考えず、ただ我々の思いだけをあなたに一方的に押し付けてしまっていました。」

そう言つて頭を下げた黄権様を慌てて頭を上げさせる劉璋様。

「う、ううん！私の方こそ、黄権は私の為を思って教えてくれたのに逃げたりしてごめんなさい！」

結局この後、どちらもが謝り謝られお互いを許し合った。黄権様は劉焉様に話を通して週に何度か街へ息抜きついでに遊べるよう説得

すると言い、本日は街へ出かけるのは我慢してほしいと言われた。
劉璋様はそれに頷き本日は街に出かけることは無かった。

「それじゃあ二人共、いつてらっしゃい。スリとかガラの悪い男には気を付けるのよ?」

「呂瓊も、劉璋様から目を離すでないぞ?」

「うん、行つてきます!母様、黄権!」

「承知しました、黄権様。」

数日後、私と劉璋様は劉焉様と黄権様に見送られ街へ出かけることとなったのだが、余りに大袈裟すぎないだろうか?一応太守の御膝元の街なのだから治安はかなり良い。まあ、心配なのだろう・・・自分の大切な娘なのだから。

（しかし、どうしてこうなったのやら・・・。）

黄権様が劉焉様に話した時、劉璋様一人では心許ないので私を護衛として付けることを条件に街へ遊びに行く事を許したらしい。何故武に関してからっきし駄目な私を護衛したのが甚だ疑問だ。

「ほら、早く行こ！呂瓊！」

そう言つて、私の手を握り駆け出す劉璋様。早く街に出たくてしょうがないのかウズウズしている。

（まあ、考えても仕方ありませんね。）

とりあえず、危険が迫ったら警羅を呼ぶ事にしましょう。

第五話（後書き）

出来るだけ改善していきたいと思いますので読み辛い点などがありましたら、ご指摘いただけると幸いです。

第六話

「ほら呂瓊！あっちで何かやってるよ、早く行こう！」

「そんな引つ張らなくても逃げはしませんよ、劉璋様。」

その言葉を全く聞かずグイグイと私の袖を引つ張って街中を歩く劉璋様。向かう先には何やら陽気な音楽に合わせた歌声が聞こえ、それを取り囲むように人の輪が来ています。

私達はその輪に入って見てみると、歌声の主を見てみると私達よりも少し幼いくらいの三人の少女が人の輪の中心で歌を歌っています。

「・・・ふむ、旅芸人でしょうね。昨日までは見かけませんでしたので、本日来たものかと。」

私がそう言うが、劉璋様は既に聞いておられなかった。どうやら彼女達の歌に夢中らしい。周りを見てみると、殆どの者が聞き入っているのか彼女達の歌と音楽以外は少し遠くにある市場の物売りの声程度しか聞こえない。

「—————♪。…………ふう、どうもありがとうございまして！」

歌い終え、一番年上らしい桃色の髪の少女がぺこりと頭を下げる。それと同時に沸き上がる歓声と拍手。桃髪の少女は笑顔で後ろにいる二人に振り向く。後ろの二人も非常に満足そうに満面の笑みを浮かべていた。

「ふえー・・・凄いなあ、私達よりも小さい子なのにすっごい歌が上手かった。」

三人の旅芸人の少女達がいなくなり、人の輪も自然と小さくなっていく中劉璋様は余韻にまだ浸っており、彼女達の歌を絶賛している。

「ええ、歌であそこまで人を惹きつけるのは凄いと思われます。」

「だよね！うー・・・もつと聞きたかったなあ・・・。」

そう言っで残念がる劉璋様。

「まあ、しばらくはこの街に居るとでしょうし・・・何度か聞く機会はあるでしょう。とりあえず、昼時ですし・・・どこか飯屋に行きましょう。何か食べたい物がありますか？」

「んーっとね、美味しい物！」

いやいや、劉璋様？美味しい物では答えになっていませんよ？

「・・・はあ、分かりました。とりあえず私の行きつけのお店がありますのでそこへ行ってもよろしいですか？」

私がそう聞くと、劉璋様は嬉しそうに頷いた。

「じじです。」

私と劉璋様が来た店はそこまで大きくはないが、美味しいと評判で多くの人が出入りしている飯屋だ。二階建ての一軒家で、二階からは街を見渡せるので人気の秘訣となっている。私が店の中に入ると、店の中は多くの人でにぎわっておりなかなかの盛況ぶりを見せてい

た。席はどうしようかと店の中を見渡していると、従業員がこちらに気付き挨拶してくる。

「あ、呂瓊さんじゃないですか。女将さーん、呂瓊さんが来ましたよ！」

従業員の言葉に反応するかのように厨房から大きい物音が聞こえ、女将と呼ばれた女性が出てくる。

肩まで伸びた茶色の髪は調理の邪魔にならないよう後ろで一括りに括っており。クリクリと大きな鳶色の目は私を見つけると目尻が下がり、顔は嬉しそうに綻ばせた。年は私より上のはずなのだが、どうも性格が子供らしく年下のように感じてしまう。

「こんにちわ呂瓊さん！」

子供のような可愛らしい笑みで挨拶する女将。女将の料理の腕もだが、この笑顔に魅力を感じここに通う者も多いらしい。

「こんにちは、今日も盛況のようで何よりです。」

「これもみな呂瓊さんのおかげですよ！それで今日はどんなされまし・・・って、りゅ、劉璋様！？」

どうやら私の後ろに居た劉璋様に気付いたらしい。その声は店中に

響き、食事中だった者はすぐさま箸を止め、頭を下げ始める。

「ほ、本日は当店にお越しいただきありがとうございます！」

女将も頭を下げる。自分達の住む町を治める太守の娘が来たのだ、畏まり緊張しているのか声色が硬い。

「わ、わ、そんな頭を下げなくてもいいよ！ほら、他のみなさんも！」

その光景に慌てた劉璋様は急いで客や女将の頭を上げさせる。

「そ、それで本日はどのような御用件でしょうか？」

基本的に劉璋様は下の者であっても着飾らず接するのだが、今まで外に殆ど出た事がない為街の者はそのような事を知るわけがない。そのせいか、まだ硬い声色の女将さん。

「女将さん、本日はこちらへ昼食を食べに来たのですが・・・席は空いていますか？劉璋様も疲れておられるでしょうし・・・相席でも構いせんので。」

「ええっと・・・相席であれば先程来られた旅の方達に了承してい

ただければ大丈夫ですが。」

『ですが相席など劉璋様に無礼かと……。』と女将さんはおどおどしながら付け加えるのだが、心配ないだろう。実際、劉璋様は相席を楽しみにしておられるようですし。

「大丈夫ですよ。その方達はどちらに？」

「・・・分かりました。二階のお座敷でございます。案内しますの
で、ついてきてください。」

そう言って二階に上がっていく女将についていく私と劉璋様。

「失礼します。」

女将さんが座敷の間にいる客に声をかける。

「あ、どうぞー」

快活そうな女の子の声が座敷から聞こえます。

（ん？この声は・・・たしか。）

聞き覚えのある声が聞こえ、女将さんが襖を開ける。

「あー！」

「おや、先程の。」

劉璋様は驚きで声をあげ、私は予想した通りだった為平然とそれぞれの反応を示す。

そこには、先程まで劉璋様が絶賛していた三人の旅芸人の少女達がいた。

相席は快く了承され、私と劉璋様は今少女達と共に昼食を楽しみながら談笑している。彼女達はそれぞれ張角、張宝、張梁といい冀州より歌を歌いながら旅をしてきたらしい。

当初、この街の太守である劉焉様の娘である劉璋様であると女将さんから聞いた彼女達も下の階の者のように畏まっていたのだが・・・。

「へえ、それじゃ私達の歌を聞いてくれたんですか？」

長女である桃髪の少女、張角が少し気恥ずかしそうにはにかみながら聞いてくる。この通り、今ではすっかり打ち解けている。

「うん！凄くいい歌だったよー皆感動してたもん！」

劉璋様はあの時に光景を思い出したのか、少し興奮気味に話している。

「えへへ・・・ありがとう。」

張角は頬を掻きながら顔を赤くし。

「当然だよ！」

次女の張宝は胸を張って。

「ありがとうございます。」

末子の張梁は淡々と言う。

それぞれ三者三様の反応を示すが、どれも声色は喜色に富んでおり嬉しそうだ。まあ褒められるのは悪い気はしませんし、それが自分達の自信のあるものであれば尚更でしょう。

「確かに素晴らしい歌でした。あなた方が去ってからもしばらくは周りの興奮が冷めやらぬほどでしたからね。」

「うんうん！」

私の言葉にコクコクと首を縦に振って頷く劉璋様。

「そういえば、張角殿達はいつまでここに滞在する予定ですか？」

「えーっと・・・人和ちゃん？」

張角は少し考えるような仕草を見せたが、すぐに考える事をやめ末子である張梁の方を向く。

「・・・滞在予定くらいちゃんと確認しておいてくださいよ、天和姉さん。」

そう言つて張角をジト目で見る張梁。張角は目を泳がせ、乾いた笑みを零す。

「はあ・・・私達は二週間ほどここに滞在する予定です。金子も心許なくなってきましたから、ここらで稼いでおかないといけませんから・・・。」

二週間、そこその期間だな。となれば・・・大丈夫か。

「ふむ・・・劉璋様、提案があるのですが。」

「ん、何？呂瓊。」

「彼女達を城に招いてみてはどうでしょうか？」

第六話（後書き）

はい、ようやく原作キャラが出せました。

またオリキャラっぽい人（女将さん）が出てきましたが、多分もう出ないと思います。

補足

張三姉妹は、まだ太平要術の書を持っていないので旅芸人として各地を回っています。その為張角はまだそこまで我儘というわけではありません。

そして、張三姉妹の口調が分からない・・・。

さて、何話で黄巾の乱に入れるかなあ・・・？

第七話

「ホントっ!？」

最初に反応したのは張宝。私と席を挟んで座っていた張宝は身を乗り出すように前傾姿勢でこちらに詰め寄る。

「ええ・・・まあ、招くというよりあなた方に仕事の依頼をしたいのです。」

その言葉に張角と張宝は張梁の方へ顔を向ける。張梁は仕事と聞いて、真剣な顔つきに変わっていた。なるほど、仕事の依頼などは一切を張梁が引き受けているらしい。

「仕事ですか・・・。一介の旅芸人でしかない私達に太守様が居られる城でどうしろと？」

張梁は率直に疑問を聞いてくる。

「あなた方の歌は帝直属の音楽家に負けず劣らず見事です、一介の旅芸人とは思えぬほどに。そこで五日後に行われる宴席の場で歌っていただきたいと思ひまして・・・。」

ここ蜀では二月に一度、労いの意味を込めて宴席の場が設けられる。勿論、労いの意味だけでなく文官と武官の溝をなくしたりする交流の場としても活用されているのだ。

「劉璋様もあなた方をいたく気に入られておりますし、ね。」

そう言つてチラリと劉璋様を見やると、首を上下に振る劉璋様。

「勿論、報酬を出しますし・・・こちら持ちで食事等も提供します。どうでしょうか？」

「・・・面白そうじゃん！ねえ、天和姉え！人和！」

「うん、私もやってみたい！ね？どうかな、人和ちゃん？」

二人は既にやる気満々のようで末子である張梁に期待の目を向ける。

「そうね・・・呂瓊さん。報酬はいくらほどで？」

「張梁殿の期待に応えられる程度の報酬は用意します。」

そう答えると、張梁は口角を上げニヒルな笑みを浮かべると手を差

し出す。

「契約成立、ですね。」

私も張梁と同じようにニヒルな笑みを顔に張り付け、その手を取った。

「ええ、それじゃ五日後ね。」

この後、張三姉妹と私達の相席での昼食は終わり私達は城に帰る事となった。
帰る間際に張角が『今までで一番良い歌を歌うつもりだから、楽しみにしててね!』と言った為、劉璋様は今から宴席の日が待ち遠しくて仕方のないようだ。

S i d e 劉 焉

「へえ、旅芸人を？」

私と黄権が執務が一段落つき休憩している時、街から帰ってきた呂瓊が訪ねてき、五日後の宴席の場で旅芸人を招いてはどうかと提案

してきた。

曰く、『帝の御鼻屑になさっている歌い手に負けぬほど素晴らしい歌い手』らしい。娘の静音・・・劉璋もその者達をいたく気に入っているそうだ。

「・・・分かったわ。なら呂瓊、あなたに宴席の事は一任するわ。精一杯やってみなさい。」

「御意。必ずやそのご期待に添えられるようします。」

呂瓊は恭しく一礼をし、部屋から退出した。

「・・・よろしいので？その旅芸人、信用が置けるものかどうか分かりませぬ。劉表の手の者やもしれませぬぞ。」

呂瓊が去った後、黄權がそう静かに口を開く。それを聞き私は思わず顔を顰めた。

劉表景升、荊州の太守。天然の要害の地である蜀を狙い続けている男であり、私が最も嫌悪する男。猜疑心が強く常に人を疑い、自分の腹心だけを周りに固めている。また、謀を好みはかりごと気に入らない人を陥れようとする。

「あの鼠めが真に狙っているのは蜀の地ではなく、劉焉様・・・あなた様を狙っておるのですぞ？あなた様を攫おうと企んでおるのやもしれませぬ。」

「・・・ええ、分かっているわ。いずれあの時のように、再び事を起こすつもりでしょう。」

そう、劉表が真に狙っているのは私だ。私を手に入れようと、今は亡き夫との婚姻の際はそれを阻止しようと幾度も謀を画策し――
――遂には蜀と荊州との戦までも勃発しそうになったのだ。勿論あちらからの一方的な侵略で、だ。

「あの時は漢王朝が仲裁をしてくれたおかげで、何とかあちらも退きましたか・・・。」

黄權が言い淀む。

「ええ、あの時はまだ漢王朝の威光が通用したけれど・・・今は無理でしょう。」

最早漢王朝にかつての力はない。それが劉表にも分かっているのか、近頃軍備を整え始めているという情報を間諜から得ている。

「おそらく、戦となるでしょうね。」

「そうなれば民草は無駄に疲弊することとなるでしょうな。」

それだけは何とか避けたい。無駄に民を、この地を荒らさせるわけにはいかないのだ。

「何とか・・・しないかね。」

私の呟きが静かに部屋の中に消えていった。

S i d e o u t

宴席の当日。城で勤めている多くの武官、文官が一齐にこの場集う。蜀の地を守る勇将として名高い嚴顔様、義将といわれる王累様を始めとする武官達。筆頭軍師である黄権様、劉巴様を始めとする文官達。それぞれが入り混じり酒を飲み交わして談笑している。

「そろそろですか。」

私は今張三姉妹を引き連れて宴席の場へと向かっている。

「うう・・・緊張してきたよう・・・。」

そう言つてキヨロキヨロと挙動不審に周りを見渡す張角。街で歌を歌っていた服を着、琵琶を手に持っている。

「大丈夫だよ姉さん！いつも通りやれば上手く行くつて！」

二胡を持ち、張角を励ますのは張宝。城での演奏のため興奮しているのだろうか、少し早口になっている。

「呂瓊さん。報酬の件、よろしく願いしますね？」

相変わらず冷静な張梁はしっかりと報酬の件を念を押してくる。

「ええ・・・皆さんもよろしく頼みますよ？」

宴席が行なわれている大部屋の前で振り向き、私は笑顔を顔に張り付けてそう言った。

「は、はいっ。」

「任しといて！」

「分かっています。」

「では、行きましょう。」

三者三様の返事を聞いた私は、彼女達を後ろに引き連れ宴席の場を隔てる扉を開いた。

「皆様方、今宵も十分に宴席を楽しんでおられますでしょうか？」

私が宴席の場に来たのを確認した劉焉様が皆を静かにするよう促し、私の声が宴席の場に静かに響く。

「本日は旅芸人の者が偶々、ここ蜀を訪れ・・・その歌を劉璋様自らが称賛するほど素晴らしかったので招くことにしました。是非お聞きになる事をお勧めいたします。」

そして、張三姉妹を宴席の真ん中に招く。

「それでは張角殿。」

「え、えー・・・ほ、本日はお招きしていただきありがとうございます！精一杯頑張りますのでどうぞ最後までお聞きいただけると幸いです！」

張角がそう挨拶をし、頭を下げる。

「で、では始めます。」

張角のその言葉と共に静かに流れ始める音の旋律。そして張角の歌が宴席の場に響き始めた。そこには先程まで緊張していた張角はならず、ただその場を歌だけで魅了し惹きつける旅芸人張角がいた。

「ふへえー・・・。」

私は劉璋様の傍でその歌を聴くことにしたのだが、劉璋様は先程から感嘆の息を漏らしている。他の武官や文官、劉焉様や黄權様すら静かに酒を飲み交わしながらその歌を聴き入っている。その場にはいつの間にかほとんど音がなく、ただ誰もが張三姉妹の歌声を聴き逃さないよう耳を傾けていた。

「――♪。・・・・・・ふう、御清聴ありがとうございました！」

歌い終わった張角が頭を下げる。それと共に大きな拍手と歓声が宴席の場に沸き上がる。

「劉焉様、いかがでしたか？」

「ええ、素晴らしい歌だったわ。たしか・・・張角、張宝、張梁と言ったわね？」

「は、はいっ！」

カチコチに緊張して直立不動になってしまっている張角。そんな張

角に優しく微笑む劉焉様。

「私の娘が称賛するのも分かるわ。今宵は素晴らしい歌をありがとう、あなた達のおかげで素晴らしい宴席となったわ。」

『そこで。』と劉焉様が付け加える。

「どうかしら、私に歌い手として仕えてみない？悪いようにはしないわよ？」

勧誘。確かにこれほどの歌を歌える者を旅芸人しておくのは惜しい。他の者達も納得しているのか、誰も文句は言わない。張角はしばらく妹達を見て・・・劉焉様の方に振り向いて首を横に振った。

「あの・・・すみませんけどそのお話は受けられません。」

その言葉に場がどよめくが、劉焉様が手でそれを制す。

「・・・理由を聞いてもいいかしら？」

「私達は大陸を回って歌ってました。私達の歌を聞いてくれた人はみんな笑顔で、『良かったよ、また今度会ったら聞かせてくれ。』・

・・そう言ってくれるんです。私達はその言葉が嬉しくて、だからもっともつと大勢の人を前に歌って——笑顔にしたい。だから……そのお話は受けません。」

静かで、それでいて強い口調で話す張角。場が静寂に包まれ誰も喋らない、いや……喋れない。誰もが彼女の強い意思に吞まれたのだ。——そんな中、劉焉様だけが優しく微笑んでいた。

「ふふ……それなら仕方ないわね。けど、しばらくはこの街に滞在するのでしょうか？」

「え、あ、はい。」

「なら、呂瓊。」

劉焉様が私を呼び寄せる。

「この者達が蜀を去るまでの間、最高級のもてなしを持って世話しなさい。」

「御意。」

私は臣下の礼をとり、頭を垂れる。

「それじゃ張角さん、張宝さん、張梁さん。素晴らしい夜をありがとう、今夜は疲れたでしょう？城に泊まっていきなさいな。」

その言葉に最初は驚き断った張三姉妹なのだが、結局劉焉様の押しに負け。

「え、えと・・・それでは御言葉に甘えさせていただきます。」

張三姉妹は城に泊まる事となった。

「それでは呂瓊、客人用の部屋に案内してあげて。」

「承知しました。では張角殿、張宝殿、張梁殿・・・こちらになりますのでついてきてください。」

「それでは今宵の宴席は終了する。皆の者、また明日から頑張ってくれ！」

劉焉様のその言葉で、二月に一度の宴席は終わりを迎えた。

第七話（後書き）

何となく張角達の独自設定。原作だとアイドルになるため？らしいですが、純粹に歌を楽しみ人を笑顔にするのが夢ということにさせて頂きました。

お知らせ

第二話の『父』Sideの部分を少し修正させていただきました。

トール・スガル様、感想感謝します。返信しましたのでよろしければご覧ください。

第八話

「それじゃ、私達はこれで。」

今私と劉璋様、そして街の住民達は張三姉妹の見送りに来ている。宴席の場で歌った張三姉妹はその後城の中や街で歌い、多くの者達をその歌で惹きつけ魅了した。劉焉様や劉璋様も去る日が近づくにつれて何度も『ここに残らないか』と勧誘していたのだが全て断られた。

「・・・この二週間、この街の人達を前に歌を歌えて本当に良かったです。」

張角がお礼を述べる。

「この街は今まで一番私達を受け入れてくれて、暖かかった。またいづれ、ここへ戻ってきたときは・・・また私達の歌を聞いてもらえますか？」

その言葉に街の住民達は歓声で応え、張角は自然と笑みを零す。

「呂瓊さん、静音ちゃん。」

張角が私達の名を呼ぶ。この日まで劉璋様はいつも張三姉妹と一緒に居た——まるで昔から一緒に居た幼馴染のように、真名を呼び合う仲になるほど。

「……。」

劉璋様は余程別れるのが辛いのか、今にも零れ落ちそうな位目に涙を溜めている。

「……天和ちゃん、地和ちゃん、人和ちゃん。また、会えるよね？」

小さく震える、か細い呟き。この時代、旅芸人の身に安全は保障できない。今まで無事だったからといっても、先の事は分からないのだ。賊に襲われる可能性だってあり得る。

「静音……あ、そうだ！」

張宝が何かを思いついたかのように手持ち袋から何かを取り出す。あれは……宝石？しかし割れているのか形が不格好だ。

「これって双子石っていつてね、私の持っている片割れの宝石と合わせる……。」

張法は胸からぶら下げていた同じく不格好な宝石を手持ち袋から取り出した宝石と合わせる。するとそれは完全に一致し、丸く美しい輝きを持つ宝石となった。

「こんな風になるんだよ。行商人の人から買ったときに聞いたんだけど、西の国ではお守りの代わりとして使われてるんだって。またその人の元に帰ってこれるようになって。だから、静音のところにまた戻ってこれるようこれをあげる！」

そういつて張宝は劉璋様に片割れの双子石を手渡す。劉璋様は双子石をジッと見つめ……。そして、涙が頬を伝った。

「あり、がとう……。大事にするから……。！だから、また、会おうね……。！」

張三姉妹も感極まったのか、涙が溢れそうになるが必死に堪えている。

「それじゃあね、天和ちゃん、地和ちゃん、人和ちゃん……。！ま

た会う時まで元気でいてね！」

「うんっ・・・静音ちゃんも元気でね！」

「またね、静音！」

「また会いましょう。静音さん、呂瓊さん。」

張三姉妹が街を出ていき、その姿が見えなくなるまで劉璋様は手を振っていた。いつかまた会える事を信じて。

「・・・劉璋様、そろそろ城に戻りましょう。」

「う、ん・・・。」

目を真っ赤にした劉璋様は私の背に隠れる。どうやら誰にも自分の顔を見られたくないようだ。私は小さく嘆息し、城へ帰る事にした。

——私達が城に戻った時、城の中がやけに喧騒に包まれている。文官も武官も誰もが忙しく走り回っている。

「・・・何かあったのでしょうか？」

「おお、呂瓊に劉璋様！探しましたぞ！」

黄權様、王累様と同じく古くから劉焉様に仕えておられる劉巴様が
大声で私達を呼び止めた。

「劉巴様、何かあったのですか？」

「何かあったところではありませぬ！大変ですぞ、劉表の鼠めが我々に対して宣戦布告をしてきました！」

宣戦布告、その言葉を聞いた瞬間劉璋様の顔つきが先程まで泣き腫らしていた顔が真剣な顔つきに変わる。

「劉巴、それは本当？」

「冗談でもこのような事を言えるわけございませぬ！劉焉様を始め皆さまが劉璋様をお待ちになっております、急ぎ謁見の間へ！」

劉巴様に急かされ、劉璋様は急いで謁見の間へと向かった。残されたのは劉巴様と私のみ。

「呂瓊・・・お主は黄権が呼んでおった。黄権は部屋におる。どうやらお主もこの戦出ることになりそうじゃ・・・。」

「分かりました。」

私は劉巴様に礼をし、黄権様の部屋に向かう。

「・・・黄権様、呂瓊です。」

「おお、呂瓊か。入りなさい。」

私の声にすぐに返答を返す黄権様。私は一礼し、黄権様の部屋に入

る。黄権様の部屋は書物という書物が所狭しと並べられ、そんな中一人黄権様が佇んでいた。

「呂瓊よ、呼び出してすまぬな。」

「劉表の宣戦布告のことは劉巴様より聞きました。・・・それにより、私も従軍することになりましたか？」

「・・・うむ、その通りじゃ。」

苦い顔をし、そう告げる黄権様。

「儂は、お主や劉璋様のような未来ある若者を戦場に放りこむことはあまりしとうない・・・。しかし、そうも言っておられぬ状況になってしもつた。既にあの鼠めは蜀に向けて軍を差し出しておるらしい。」

「既に・・・ですか。」

劉表の軍には黄忠、蔡瑁、王威などが従軍しているらしく荊州との全面対決は避けられないとのこと。

「お主には武の才は感じられず、武官としての能力はさほどない。じゃが、軍略・計略に関する才であればいずれ儂・・・いや稀代の軍略家すら超えられるじやろう。劉焉様も儂もそれを期待してお主

に様々な事を教えてきた。」

「……。」

「じゃが、お主には経験が足りぬ。おそらく劉焉様はここでお主にその経験を積ませるおつもりじやろうな……。呂瓊よ、お主に人を殺す覚悟はあるか？」

静かに、しかし有無を言わさぬ威圧感を持って黄権様がそう問う。

「武人は直接的に人を殺す、だがそれは百に満たぬ。我等軍師は間接的に千の人間を、時には万の人間を敵味方問わず殺すこととなる。戦場で策を誤れば、味方を、そして民を危機に晒す。時として自身の命を持って計略を為さねばならぬときがある。それが我等軍師の役目だ。呂瓊、その覚悟があるか。」

「……私はもとより、この身とこの命は蜀の為に捧げております。この命一つで蜀の地を救えるなら迷いなく^{なげう}投げましょう。私の策一つで千の民を救えるのであれば、迷うことなくその策で万の敵を殺し、その恨みを背負いましょう。」

私は良い淀むことなくそう言い切り、黄権様を見据える。しばしの沈黙ののち、黄権様は笑みを浮かべる。

「ほつ……。良き目をするようになったの、呂瓊。」

黄権様は皺くちやの手を私の頭に寄せ、優しく撫でる。

「——これならば、お主に蜀を任せる事が出来るわい。」

「・・・黄権様？」

黄権様の小さな呟きに私は反応する。

「蜀の地を、劉焉様・・・そして劉璋様を頼むぞ？」

まるで死地へ出向く前のように、黄権様はそう静かに告げる。

「黄け・・・っ!？」

私が黄権様の名を呼ぶ前に、私の頸に黄権様の手刀が入り・・・私の意識は闇に落ちた。

Side 黄権

「黄け・・・っ!？」

儂の手刀で意識の途切れた呂瓊の体が崩れ落ちる。それを優しく支え、床に寝転ばせる。

「呂瓊・・・すまぬな、まだお主には教えてないこともたくさんある。もっと多くの事を学ばせたかったが・・・それも最早叶わぬ。」

儂は目を伏せ、静かに開く。その目には死を覚悟したものしか灯らぬ輝きを持っていた。

「黄権。」

劉巴が扉の前で立っていた。我が親友にして戦友、劉焉様にすら教えておらぬ儂の策を知る共犯者。

「うむ・・・劉焉様、我らが最初で最後の不義理をお許しください。」

ここにおらぬ自身の主に向けて深く心から謝罪する。そして最後に、眠る愛弟子を見やる。

「では行こうぞ——我らが——最後にして最期の策を持って《
 ．．．．．》蜀の地を守らん。」

そして我等黃權、劉巴は……蜀の地を裏切り劉表軍の下へ馬を奔らせた。

Side out

第八話（後書き）

急展開すぎましたかね？

この後の展開が予想できる方もおられるかもしれませんが、それを超える斜め上の発想が出来たらいいな・・・と思っております。

補足

双子石、FF11（したことありませんが）と同じ感じでしょうか？
この小説では、その片割れの持ち主の許へ帰ってくるという意味合いを持ったお守りとしての認識が強いです。

シャナたん様、感想感謝します。返信しましたので、よろしければご覧ください。

第九話

「う．．．？」

「あ！気がついた、呂瓊！？」

薄らと目を開くと、劉璋様が私を覗き込んでいた。私が目が覚めた事に気付き、劉璋様は安堵の息を漏らす。

「ここは？」

「医務室だよ、黄権の部屋で倒れていたのを侍女が見つけてね。」

「つ．．．黄権様は？」

そう、私は黄権様にたしか．．．。手刀を打ち込まれた自分の頸をさすり、あの時の事を思い出す。

劉璋様は黄権様の名が出ると悲しそうに顔を歪めた。

「．．．呂瓊、よく聞いてね？黄権と劉巴は．．．劉表の下に降ったわ。」

つまり——裏切った、劉璋様はそう遠回りに言った。

「呂瓊を見つけた後から、劉巴と黄権の姿が誰も見ていなかったの。それで侍女や副官の人が色んな場所を探したの。そしたら……。」

そこで一旦口を閉じ、言葉を探すように目を泳がせる劉璋様。

「そしたら……劉巴の部屋に、何通もの手紙が——劉表との密約の手紙が置いてあるのが見つかったの。黄権の部屋にはなかったのだけれど……おそらく黄権にも同じような手紙が来ていたと思う。」

『おかしい』、その話を聞き私はまずそう思った。仮に裏切るのであれば、何故手紙を焼かない？時間がなかったから？否、手紙は見たら即刻破棄するのが常道。

それに黄権様だ。黄権様は、何故自分にあのような事を言った？自らが裏切るのに蜀を頼むなどと。

「その手紙に書かれていた内容は？」

「えっと……機が来たら蜀へ攻める故、その時にこちらに降ること。報酬のこと。それと……わざとこの手紙を見つけさせること。」

「——わざと？」

つい聞き返す。何故わざと手紙を残すのだ？見つければ即刻処断される

「うん、それしか書いてなかったから何で手紙を残す必要があったのか良く分らないんだけどね。」

そう言っている劉璋様を尻目に、私は目を閉じて考える。

何故手紙を残す、捨てるが常道、残すは外道。大きすぎる危険を冒して何を得る？劉巴様、黄権様、劉表。はかりごと謀を企むを最も好むは劉表、ならばこれも謀の内か？黄権様、劉巴様は共に古参の臣として信用されていた。ならばこれは蜀に・・・否、劉焉様に動揺を与える為か？それとも内が混乱している間に一気に蜀を奪取するつもりか？グルグルと頭の中で幾つもの考えが浮かび、没していく。

「・・・劉焉様は？その事を知っておられましたか？」

その言葉に劉璋様は首を横に振る。最初に考えた嘘の内応というわけではない、か？

「母様は何も知らなかったみたい。黄権も、劉巴もそんな素振りを見たことなかったって。だから、母様は最初は信じてなかったんだけど、『密約の手紙があった以上最早擁護は無用、裏切り者には裁きを』って・・・武官の多くはそう言って黄権と劉巴に追手を差し向

けるべきって……敵顔と王累の二人はそれに対して異議を述べたけど。」

敵顔様や王累様のお二方とも、黄権様と劉巴様と友だった。おそらく信じておられるのだろう、黄権様と劉巴様が裏切るような真似をするはずないと。共に蜀を支えてきた者が、何故劉表などの下に降るのかと。

「母様は武官の勢いに押されて、追手を差し出す事を告げたわ。けど……軍議が終わってすぐ倒れたの。当然よね、信じていた臣下が裏切ったんだもん。心労が溜まっても不思議じゃないわ。」

「……。」

ゆっくりと目を開く。

やはり。おそらく劉表は——いや、黄権様か劉巴様の謀かもしれぬが劉焉様に動揺を与える為にわざと手紙を残した、か。信を置いた者達の裏切り、それが与える動揺は計り知れぬ。しかし……これが黄権様達の謀であるなら。

「……民達は？」

「え？」

劉璋様は一瞬、私が何を言っているのか分からず聞き返してきた。

「民達の反応は、どうなのですか？」

そう、黄権様達の謀であるならこの動揺を将兵のみで終わらすはずがない。いや、むしろ動揺をある方向に持っていくはずだ。

「えっ・・・と？」

「おそらく噂が流れているはずです。『黄権及び劉巴の二名は、劉表の提示した報酬に釣られ蜀を裏切り劉表の下へ降った』・・・これに似た噂が・・・おそらく、これよりも酷い噂でしょうがね。」

最後は小さく呟いたためか劉璋様の耳には届かなかったようだが、その方がいいだろう——結局知る事になるだろうが。

私は寝台から起き上がり、医務室を出る。目指す先は黄権様と劉巴様の部屋だ。

「そんなっ・・・!」

「ちっ・・・。」

「あ奴らがこのような事をするはずが・・・。」

上から順に劉璋様、王累様、嚴顔様。

あの後、黄権様と劉巴様の部屋に向かい片っ端から書類関連を調べた。そして見つけたのは、数々の不正の証拠と思わしきもの。そして街で流れた噂を衛兵から聞くと、私の予想よりも遥かに酷い内容。

「——数々の不正、汚職でその懐に金を溜めこんだ黄権、劉巴は太守である劉焉様にその不正が気付かれ始めた為自らの保身と利益の為に劉表に取り入り、ここ蜀の地を裏切った。」

そついった内容だった。そのせいか民達どころか將兵すらも怒り狂い、黄権様と劉巴様を誅すべしと意気込んでいる。
私はやはり黄権様か劉巴様の謀か？と小さく呟く。

「——あ奴らがこのような事をするはずがないっ！儂等がそれを一番よく知っておる……！」
強く机を叩き、そう切り出したのは敵顔様。手は強く握りしめすぎたのか、血が垂れてきている。

「しかし桔梗よ、この書類もまた事実かもしれないんだぜ？目を背けるのは構わねえが、それは一時の事のみにしておきな。」

桔梗・・・敵顔様を諫めたのは王累様。

「^{ながれ}流っ！お主はあ奴等の事を信じておらぬのかっ！？」

敵顔様が立ち上がり、王累様の胸ぐらを掴む。王累様も同じように敵顔様の胸ぐらを掴む。

「っ信じてるに決まってるだろうが！だからこそ、冷静に今の事態を見なくちゃならねえんだろっ！それくらい分かりやがれ！！」

敵顔様に負けない大声を出し、王累様は敵顔様を睨みつける。

「す、すまん・・・少し取り乱した・・・。」

幾許か冷静になった敵顔様は、掴んでいた胸ぐらを離し王累様に謝

る。王累様は手を振って氣にしないという素振りを見せた。

「・・・あたしだってあの二人が不正なんて、それどころか蜀を裏切るような真似をするはずがねえと思ってる。だってよ、あの清廉潔白な二人だぜ？確かに軍師としてはやる事は汚いときだってあったさ・・・けどよ、あいつらは民の為をいつも思ってたんだ。」

「ああ。」

「・・・しかし、もしここにある不正が事実無根のものであったとしてもだ。民衆の間に流れてる噂は中々消えねえし、事実が本当かどうかを確認する時間が足りねえ。噂を正す時間もな。」

そつ、劉表は今現在蜀に向けて進軍しているのだ。黄権様達の不正事実の真偽を調べている時間などない。

「このまま行くとあいつらは完全に蜀を裏切った悪として心象付けられる。將兵からも、民衆からもな。」

そして、それを擁する劉表もまた悪として位置付けられるだろう。劉表は『欲に塗れ蜀を裏切った黄権、劉巴を擁している』以上、蜀で心象は悪くなる。もし仮に劉表が此処を統治することになっても、民達の心は既に離れている。いずれ蜂起を繰り返され疲弊するだろう。

「・・・・・・・・。」

私は頭の中で幾つもの考えを浮かべては黄権様、劉巴様が何を考えてこのような行動を起こしたのかを推測する。

「敵顔様、王累様。出立の準備が整いました。」

そうしていると、王累様の部隊の者が部屋の外でそう告げる。

「・・・・桔梗。」

立ち上がり、敵顔様に呼びかける。

「分かっておる、分かって・・・・おる。」

敵顔様も俯いて立ち上がるが、唇を噛みしめているのが見えた。

「呂瓊殿は、劉焉様と共に軍師として従軍せよとのこと。」

「分かりました。すぐ仕度します。」

第九話（後書き）

さて、次話で戦が始まるかな？描写が難しいでしょうが頑張ります・
・・。

練炭様、感想感謝します。返信したのでよろしければご覧ください。

第十話

成都、蜀の本拠を出立して私達は劉表軍に最も近い場所に対峙してある関へ到着した。関についてすぐ、劉焉様は將達を集め今後の行動について話し合うこととした。

「——関の物見からの報告によりますと、劉表軍は現在関からおよそ東へ20里行った先の平地に陣を敷いており、牙門旗は劉王、蔡、黄とのこと。」

将の一人である張任様が関からの報告を告げる。

「また、黄権・劉巴の二名の姿を確認したと間諜より報告がありました。おそらくこの戦、軍師として我等に対するでしょうな。」

黄権様、劉巴様の名が出ると場がざわめき、将の多くが『裏切り者め。』『恩を仇で返すとは・・・不忠の極みだ。』と言っているのが聞こえた。

「・・・そう。」

劉焉様はまだ気落ちしておられるのか、顔が暗い。

「？賢、どう？」

劉焉様のその言葉に黄権様が劉表軍に降った後、急遽筆頭軍師として抜擢された？賢様が口を開く。

「そうですね・・・あちらの戦力はおおよそ六千程、こちらは関に二千と成都から出立した我々の軍が六千・・・兵の数はこちらに分がありますし、更には我々には関と言う地の利があります故我々の方が有利です。」

ただ、と？賢様は続ける。

「あちらに黄権殿と劉巴殿が降った以上、彼等の動向に注意しなくてはならないでしょうね。私達の予想を超えた行動をとってくるやもしれません。・・・ここは下手に討って出るよりかは様子見で関で守りに徹した方がよろしいかと。」

「？賢、何を言っておる、臆病風にでも吹かれたか？劉表軍などという烏合の衆を相手に守りに徹するなどとは！」

兵力差で勝っているのに守るのが嫌なのか将の一人がそう怒声を上

げる。その怒声を切つ掛けに『そつだ、何故守らねばならぬ。』
討つて出るべき。』などという言葉が飛び交い始める。

？賢様はこめかみを押さえながら溜息を吐いた。

「……皆の者、我々は兵力差で勝っていますが地の利である関があります。何故その利である関を捨ててまで攻めねばならぬのです？頭を冷やされよ……。」

？賢様がそう言うが、将達は全くその言葉に耳を貸さない。

「劉焉様、劉表軍は行軍で疲れております。この機に乗じ今すぐ攻めたほうがよろしいかと。」

「……お主等、あちらにはあの黄權と劉巴がおるのじゃぞ？あ奴等が何らかの策を講じておるやもしれんのに、むやみやたらに動けばそれこそあちらの掌の上じゃ。それに行軍で疲れておるのはこちらも同じ。ここは？賢の言うとおり一時守りに徹し、敵の動きを見た方がいじやろつ。」

敵顔様が将達を静かに諫める。それでも不満を口に出そうとする将を睨みつけ、黙らせた。

「……？賢と敵顔の言うとおり、ここは一時守り徹する事にするわ。守るにせよ、攻めるにせよ敵の様子を見るに越したことはないわ。皆来たるべき時に備えて、しっかり英気を養いなさい。」

この決定に不満を抱いた者もいるが、主である劉璋様の決定の為逆らう事が出来ず軍議は終わりを告げることとなった。

「さて・・・どうしたものでしょうか。」

関の物見台で私一人そう呟く。眼下には劉表軍の天幕が幾つも立ち並んでいるのが見える。

「黄忠、王威、蔡瑁・・・。蔡瑁は水軍に関しての扱いは上手いと聞く。まあ、陸ではそこまでではないと聞いていますが・・・厄介なのは黄忠と王威か。黄忠は敵顔様と同等以上の神懸かった弓術、

王威はこと野戦に関して凄まじい武を振るう。」

相手方の情報を口に出しながら整理する。

「劉表自身は戦上手でない、が黄権様と劉巴様があちらに付いた以上用心が必要。その他の将兵はあまり名を馳せていないが・・・それでも平野での戦であれば厄介な者もいるだろう。対するこちらは嚴顔様、王累様、張任様・・・嚴顔様は野戦を得意とされるが他の方々は基本的に守りに徹した方が得意だ。」

天然の要害である蜀という地故の弊害か、蜀の将は基本的に関による防衛線は得意ではあるが野戦自体は不得意とする。勿論、不得意なだけで出来ないわけではない。だが、劉表達は平地での戦は戦い慣れている。

「先程の場では嚴顔様が他の将達を諫めてくれたが・・・。まったく、何を考えておいでなのか・・・。兵の量、質共に確かに我等の方が上だろうが、無策で討って出ては無為に兵を死なせるだけではないか。」

おそらく、黄権様と劉巴様の件で頭に血が上りすぎているのだろう。時を置く事で、幾分か冷静になってくださればいいが・・・。

「にしても、私は劉璋様の護衛ですか・・・。」

将としては余り役に立たないことを自分でもよく分かっている。武
に関して言えば敵顔様、王累様・・・本来護衛するはずの劉璋様よ
りも遥かに劣っているのだ。精々凡将と数合討ち合えばいい方で、
兵達に囲まれればそれこそ窮地に立たされる。

「何故、劉焉様は私を護衛にしたのか・・・。」

劉焉様は劉璋様に討つて出る際には本陣近くで出陣するようにと命
じた。危険は少ないだろうとはいえ・・・それでも戦場だ。何時、
何が起こるかも分からない。窮地に立たされた時、私のような者が
いれば足手纏いではないのに。

「・・・ここで言っても仕方がない、か。今はとにかく、劉璋
様の御身を守る事だけを考えてしよう・・・。」

数刻後、劉表軍は何の動きも見せずただ陣を敷き蜀の軍勢と睨み合っていた。

「奴等が何もしてこぬ以上、今こそ攻めるべきです！」

「睨み合いをしていては無駄に時間が過ぎ民達に不安を募らせるだけです！」

ダン、と机を強く叩き討って出る事を主張する将達。

「お主等、平野での分はあちら側にある事が分かっておるのか？」

「そうです、幾ら兵が優っても戦略次第で戦況がひっくり返ることだってあるのですよ？」

籠城し、敵勢の動向を監視し長期戦にすべきと主張する嚴顔様、賢様。

平行線のまま軍議は続いていた。

「……呂瓊、呂瓊はどうすればいいと思う。」

劉璋様が小声で聞いてきた。

「そうですね・・・どちらの主張も正しいでしょうね。ただ――
――何も仕掛けて来ない、というのが私にとって異常に思えます。」

そう、何故何も仕掛けて来ない。ただ兵が疲弊しているのか、私達をわざと誘っているのか、それとも私達のように揉めているのか。

「どちらにしろ、このまま睨み合いを続ければいずれどちらもが集中力が切れましょう。」

私は横目で劉焉様を見やる。劉焉様は目を閉じたまま、考え込んでいる。

「・・・皆の者。」

劉焉様が静かに目を開き、立ち上がる。

「二刻後、敵に何の動きがないようであれば討つて出るわ。敵顔、
？賢の言い分も分かるけど余り時間をかけていられないのよ。物見
によれば私達が関に入って、不穏な動きがあったわけじゃないわ。」

「しかし・・・。」

？賢様が口を開こうとするが、それよりも早く劉焉様が口を再び開く。

「それに・・・余り長く戦をすれば民に不安を募らせることになる。敵の思惑がこちらを平地に誘い込む事であつたとしても・・・。」

「・・・分かりました。ですが、敵が何らかの策を仕掛けてくるやもしれません。それだけに關しては退けませぬゆえ、必ず対応できるよう伝令部隊等を編成しておきます。」

劉焉様のその言葉で、？賢様は諦めがついたのか小さく溜息を吐いてそう話す。

「ええ・・・ありがとうございます。」

そして、二刻後——私達蜀軍は討つて出る事となつた。

第十話（後書き）

次回は戦闘です。陣形とか調べとくべきかな・・・？というか、日本で行われていた陣形ってあの時代使われていたのだろうか・・・。

第十一話

Side 劉巴

「始まったか……。」

蜀軍が討つて出た。その報せが届き、黄忠を始めとする劉表の配下はすぐさま隊を整えた。

「随分と時間をかけたな……大方、？賢辺りが関に籠る事を主張したか？」

「劉巴殿、劉表様がすぐに天幕へ来いと呼びでございます。」

伝令兵が私を呼びに来た。

「分かった、すぐに向かおう。ご苦労だったな。」

「はっ。」

「さて、黄権よ……行くでしょうか。我等表裏比興の奸臣として、主君を討たん。」

伝令兵が去った後、私のその声は静かに天幕の中へ消えていった。

S i d e o u t

「敵軍の様子は？」

「黄忠、王威、蔡瑁を筆頭に既に戦闘態勢に入っております。劉焉様、御下知を。」

劉焉様が腰に差していた宝剣を抜き、天に掲げ・・・その切っ先をゆつくりと劉表軍に向ける。

「ええ・・・。いいか、勇猛なる蜀の将兵よ！無駄に民草に不安を募らせ、我等の地へと進行してきた愚か者の劉表軍に我等の恐ろしさを存分に味あわせてやれ！——全軍、突撃せよ！」

地を震わせるかのような声が幾つも重なり響き合い、蜀軍と劉表軍がぶつかり始めた。関より出てきた蜀軍は七千、残り三千は関の守りと救援部隊だ。

怒声、悲鳴、幾つもの声の戦場の至る所から聞こえてくると共に、血の臭いが戦場より流れてきた。

「・・・っ。」

死の臭い。あの時村で嗅いだ、死の臭いだ。あの時の村の記憶が鮮明に脳内に映し出される。赤い、紅い、血の色と燃え盛る炎が全てを染め上げた。家畜も、人も、家も、自分自身も全て。必死に漏れそうな嗚咽と嘔吐感を抑え、戦場に目を向ける。

「大丈夫・・・呂瓊？」

劉璋様が心配そうな表情で私を見やる。私は笑みの表情を張り付け、心配ないと促す。

「——大丈夫、ですよ。」

「・・・そう？」

劉璋様と私の間に、沈黙が流れる。
戦場を見れば戦況は、拮抗したままだ。

S i d e 王 累

「進め進め進めえ！劉表軍を分断してやれ！」

私の号令が響き渡る。私と敵顔が劉焉様から授かった部隊は共に八百。八百の騎馬隊を率いた私は偃月の陣で先頭に立ち、敵軍をまるで絹を切り裂くかのような突撃を幾度も行う。

「うわあああ！」

「ふんっ！」

恐慌状態に陥り、私に突撃を行ってきた敵の雑兵に向けて槍を突き刺す。心臓を突き刺された雑兵は力無く地に倒れ伏す。

「雑兵にかまけるな！我らの仕事は敵軍の分断だ、後の仕事は他の部隊に任せる！」

騎馬を走らせながら号令を下す。

「王累様、右前方より敵軍です！」

私は副官の指差す方を見る、そこには『王』と刺繍のしてある牙門旗がはためきこちらに向かってきていた。数はこちらより若干少な

めであり、魚鱗の陣を構えている。

「牙門旗が王・・・となりや、王威か？」

私は槍をしっかりと持ち直し、向かってくる軍団を睨みつける。

「皆の者、我等の前に立ちはだかるなどという愚行をした愚か者共に恐怖を刻みつけてやれ！」

私の声が響き渡った数瞬後、部隊から咆哮が響き渡り私達は王威の部隊とぶつかった。

「押し潰せえ！」

「敵兵に情けをかけるな！」

怒声と号令が響き渡る中、私は敵の雑兵を薙ぎ払う。横に薙げば敵の体を檻褸衣のように裂く。

「むんっ！」

一頭の騎馬が私に向けて大斧を振り降ろしてきた。

「ぐっ!?!」

それをかろうじて受け止め、私とその騎馬は距離を取る。その騎馬に乗っていたのは、最低限自身の急所しか守っていない赤い鎧を着込んだ筋骨隆々とした大男。その手には何人もの蜀軍の兵士を切り裂いたであろう血で真っ赤に染まった大斧を持っていた。

「我が名は王威!王累殿とお見受けいたすが、いかに!?!」

腹の底まで響き渡るような重低音の声。

「貴殿の言つとおり、私が王累だ。」

私のその言葉を聞き、王威は私の顔を見て口角を上げる。

「ほう・・・なるほど、噂に違わぬ美しい女子だ。頸を取るには惜しいな。どうだ、我が軍に降らぬか?出なければ・・・少々手荒な真似をすることになるか?」

何をするかと思えば、勧誘か。更には脅しまで。

「――ほざくな、下郎。我が身は蜀の為に捧げている、貴様等の下に降る気も・・・捕らえられて慰め者になる気も無い。」

私は王威に槍を突き付け、そう言い切る。

「そうか・・・それならば仕方あるまい。腕の一本、失っても後悔するなよ?」

「それはこちらの科白だ。」

王威が大斧を構え、私もそれに合わせて槍を構えた。

S i d e o u t

「敵将王威と王累様が一騎討ちを始めた模様!」

「・・・そう。」

伝令兵の言葉に? 賢様が顔を顰める。王威といえは野戦で猛威を振るう将だ、それを一騎討ちの間抑えられる分敵勢力は一時的に戦力が下がる。だが、それはこちらも同じ事。それどころか、もし王累殿

が討たれることとなれば全軍の士気に関わる。無論、あちらも同じだが。

「・・・伝令兵、左翼に展開している張任に中央の救援に向かわせなさい。中央の戦力が低下している間に押し切られては困るから。」

「はっ。」

「劉璋様、あなたは左翼へ後詰として向かっていただけませんか？・・・劉焉様はあなたを戦場に出す事を嫌がっておいででしたが、いずれ戦場に立つ日が来ます。遅いか、早いかの違いであれば戦場の空気には早めに慣れていただくのがよろしいですから・・・。」

「・・・分かったわ。」

？賢様の言葉に劉璋様が頷く。

「呂瓊、行くわよ。」

「御意。この身に代えましても、劉璋様の御身を守り抜きましよう。」

劉璋様は千五百の兵を引き連れ、本陣より左翼へ向かう。

「敵顔！」

左翼で展開していた敵顔様を見つけ、劉璋様が声をかける。

「おお、劉璋様！後詰とは有難い！」

「勢いに乗って、一気に蹴散らすわよ！」

「御意！・・・って、呂瓊よ。お主は下がっておいた方がいいのではないか？碌に戦えぬだろう？」

私に気付いた敵顔様が不安そうな顔でそう言ってきた。一応腰には剣を差してあるが、殆ど役に立たないだろう。

「まあそうなのですが・・・一応、劉璋様の護衛ですから。自分の身を盾にすることくらいなら出来ましよう。」

「・・・そうか。頼んだぞ、呂瓊。」

敵顔様はそう呟き、敵陣に向けて馬を走らせた。敵顔様の軍と劉璋様の後詰部隊の一部もそれに続く。

「劉璋様、我等は如何致しましょう？」

「うーん・・・私達は敵顔の後ろを守って 이곳。敵顔達は後詰部隊が入ったからある程度余裕が出来たとは思っけど、油断できないしね。」

「御意。」

敵顔様達の後ろで討ち零した敵兵を劉璋様の軍が殺していく中・・・左翼、中央は未だ拮抗状態が続いている。右翼に関して言えば少々こちらが有利となってきたか。

「・・・？」

ふと戦場での違和感を感じた。一部隊だけ、やけに遠くの方で動いている。

「・・・あれは。」

目を細め、牙門旗を見る。そこに刺繍されている文字は——
『黄』。

そして、先頭で騎馬に乗っている者が動きを止め・・・何かを引き絞るような動きを見せた。

「———っ。」

それを見た瞬間、私の体は劉璋様の下へと駆け出した。『黄』の牙門旗、劉表軍の中で黄の姓を持つ者は黄祖と黄忠・・・そして黄権様のみ。黄祖・黄権様は戦場で指揮を執るよりも本陣で執る方に優れている。となれば、残っているのは神懸かった弓の腕前を持つ黄忠のみ。

「不味いつ・・・。」

太陽の光を反射して煌めいた何かが劉璋様に向けて勢いよく空を裂き飛んできた。

「劉璋様っ！」

柄にもなく、大声を出し劉璋様を右腕で突き飛ばす。その瞬間――私の右腕に矢が突き刺さった。

第十一話（後書き）

どうでしたでしょうか？今更ながら、戦場での雰囲気など全く分かりません。どうやったらいいんでしょうねえ……。

補足

陣形についてですが、簡単に説明しておきます（引用：wiki）

偃月の陣・・・部隊を「^」の形で配置する陣形。大將が一番前に出てくるので危険が大きく、戦死する可能性が高い。だが、先頭に大將がいるので士気が高く敵に切り込むのに適しています。本来はもつと少数の部隊でするのか？

魚鱗の陣・・・部隊を「」の形で配置する陣形。底辺の中心に大將が配置しており、そちらを後ろ側にする。突破力が高く、機動性が高い等といった形。ただし包囲されやすく、両側面や後ろからの攻撃に弱い。

少数で編成されるので、例えば一部隊を失ってもすぐに次の部隊を出せるので消耗戦に強い。

第十二話

「ぐっ・・・!？」

私の右腕に矢が刺さったのを見た瞬間、右腕が焼ける様な痛みをもった。

「呂瓊!？」

突き飛ばした劉璋様が私に駆け寄ろうとするが私はそれを手で制する。だが、劉璋様はそれでも駆け寄る。

「呂瓊・・・血が、こんなに・・・!」

右腕から血が溢れ出てくるが、意識を失うほどではない。無闇に動かなければ大丈夫だろう。

「・・・私は大丈夫です。言ったでしょう、劉璋様。この身を盾に少しでも劉璋様の御身を守ると。」

私がそう言つと、劉璋様はしばらく俯き・・・顔を上げ立ち上がる。

「伝令兵、呂瓊を本陣に送つて。呂瓊一人じゃこの戦場では拙いだろうから。」

「御意。」

伝令兵は私をおぶさると、本陣へ向けて走り出した。

「・・・皆の者、よく聞け。今より敵顔と共に、敵部隊に攻撃を仕掛ける。追いつけぬ者は捨て置く、分かったな！」

遠くなつていく劉璋様から、そんな声が耳に届いた。

Side 王累

「はあああああ！！！！」

「むううう！！」

槍と大斧がぶつかりあい、火花を散らす。もう既に20合以上は撃

ち合っただろうか、王威の顔に疲れが見える。額には大粒の汗が滝のように流れているが、決して私から目を離そうとしない。

「どう・・・した・・・？随分と疲れて、いるじゃないか。」

私は軽口をたたき、その間に唾を飲み込み少しでも乾いた喉を潤す。

「お主、こそ・・・肩で息して・・・いるではないか。お互い様であろっ？」

余裕を表そうとしたのか、王威は口角を上げ笑みを作る。

「・・・ふん、次で、終わりにしてやる。」

槍を構え、キッと王威を睨みつける。次の一撃で全てを懸ける。

「それは、こちらの科白だ・・・！」

王威もまた、大斧を腰を落として構えた。

「・・・。」

「……。」

ツウ、と頬に汗が流れるが今の私はそれすら気付かない。全身の感覚を目の前に居る男を殺す為に向いているのだから。

数瞬の静寂が場を包み、双方同時に動いた。

「シッ！……！」

今までで一番速い速度で空気の壁を貫きながら王威の胸を貫かんとする私の槍。

「はあああああ！……！」

凄まじい風切り音を鳴らしながら横薙ぎに振るわれ、私の胴体を下に切り裂かんとする王威の大斧。

そして——横薙ぎに払った王威の大斧が私に当たるよりも早く、私の槍は王威の胸を貫いた。

「くっ……！？」

だが、勢いのついた大斧はなおも私を切り裂かんと狙ってくる。私は馬から落ちる様な形で大斧を何とか避けた。

「はあっ・・・はあっ・・・！敵将王威、この王累が討ち取ったあ
！！！」

私が立ち上がりそう高々と宣言すると、私の部隊が少し遅れて歓声を上げた。

S i d e o u t

「王累様が敵将王威を一騎討ちで討ち取ったとのことですよ！」

「よくやったわ！全軍に伝えなさい、この勢いに乗って一気に畳みかけろと！」

？賢様の言葉を聞いた伝令兵はすぐさま戦場に戻っていった。

「？賢様。」

右腕の治療・・・といっても包帯を巻き止血した程度だがまだ体は

動く。となれば、劉璋様の許へ再び行かねばならない。

「呂瓊・・・あなたはここにいなさい。」

？賢様が有無も言わさぬ口調でそう言い切る。

「しかし・・・。」

「しかしも案山子も無いわよ。怪我人を戦場に出させるとでも？しかもあんた、利き腕は右腕でしょう？利き腕が怪我した状態で戦場なんて出たらすぐに殺されるわ。・・・それにね、あんたは劉璋様を守った。それだけでも充分なのよ？」

？賢様はそう言ったきり、私の方を見ようとしなかった。

「・・・。」

誰にも気付かれぬよう嘆息を吐いた私は最早勝ち戦となりつつある戦場をボンヤリと見つめた。

S i d e 劉巴

「王威様が敵將王累との一騎討ちで討ち死にした模様！」

「な、なんじゃとう！？」

伝令兵の報告に慌てふためく目の前の男・・・劉表。痩せこけた体、鼠のような顔、ギョロギョロと目だけが宙をさまよい動きまわっている。

「ど、どどどどうすればいいのじゃ！王威がおらねば野戦など勝てんぞ！？こ、黄祖！何か策は、策はないのか！？」

傍で控えていた黄祖が頭を垂れ、口を開く。

「劉表様、ここは一旦退きましよう。最早これは負け戦でございます。何、いずれ蜀で再び我等に内応する者が現れるはず。その時こそ、蜀と劉焉を手に入れるとき。今は耐えるのです。」

「そ、そうじゃな！ぜ、全軍退つ・・・！？」

劉表が振り向いて、退却の命令を下そうとしたがそれを行う事は出来なかった。

「な、なななりゆ、劉巴！貴様何を！？」

そつ、私が剣を抜き劉表に向けているから。

「何を・・・と言われましても、主に剣を向けているだけですが？」

「貴様あ！がつ・・・！？」

黄祖が私に斬りかかってくるが、近くの衛兵・・・いや私と黄權の私兵にそれは阻まれた。

「いやはや、あなたをここに出向かせるまで苦労しましたよ。劉表殿？」

何度も密約の手紙を交わしたが猜疑心が強すぎる劉表とは中々上手く信頼関係を築く事が出来なかった。その劉表の信頼を得る為に、まず不正を行わねばならなかった。

「な、何だと？」

「まず、私が何故あなたの内応に応じたか分かりますか？・・・簡単ですよ、この先あなたは蜀にとって今に邪魔な存在になるだろう、だからです。」

そう、劉表は私の他に蜀の野心家共に接触を図っていた。漢王朝が力をもった平和な時代ならまだそれもいいだろう・・・いずれ炙り出せば済む事だから。

しかし、今は違う。漢王朝の力が衰退してきた今、乱世になりかけているのだ——放っておくには、危険が大きすぎる。だから表舞台であるこの戦場に引き摺りだしたのだ。

「ふ、ふざけるな！そ、そんなあやふやな事の為に自分の親友を殺したというのか！？」

そう、黄權は私が殺した。劉表からの信を完全に得る為に黄權の頸を土産にするために。

「ああ、私も黄權も・・・蜀の為に命を散らす事は惜しくないのですね——例え汚名を被ろうとも、帰る場所を二度と失おうとも・・・それが蜀を守る為ならばな。」

民達に流した噂は、自分達の帰る場所を失くす為。内応した以上、二度と蜀の地は踏めぬと思っているが劉焉様の事だ。私達を許す可能性がある。それをさせない為に、民達と将兵に私達の不正の噂で怒りを覚えてもらわねばならなかった。

劉焉様に何も相談しなかったのは、劉焉様が私達の策とも呼べぬこれまでの稚拙な策を嫌い、止めさせようとするからというのと・・・間諜の耳が何処にあるか分からなかったから。

「さて・・・先に逝って待っているがいい、劉表よ。何、心配するな・・・すぐに私も逝くさ。」

「い、嫌だ！死にたくない、死にたくない死にたく・・・！」

喚き叫んでいる劉表の胸に私は無言で剣を突きたてた。その剣は胸を貫通し、深々と突き刺さる。劉表は口を金魚のように開くが、最早声も出ていない。しばらくの間痙攣していた体は力無く倒れ伏し、劉表景升は亡き者となった。

「・・・さて、私も逝くのでしょうか。友よ、今そちらに逝くぞ？」

私は劉表の胸から抜き取った剣を自身の喉にあてがい・・・横に滑らせた。

第十二話（後書き）

ううむ・・・全く自分じゃ納得いかない文です、でも一応上げてみる。文才以前に語彙力足りないっていうのが自身でもよく理解出来ます。

読み辛い等の点がありましたら、遠慮なくご意見ください。

第十三話

——蜀軍は劉表軍に勝利して早2ヶ月。

あの後蜀軍は敵將王威を失い、戦意を削がれた所に関からの増援を加えて突撃を開始した。蜘蛛の子を散らすように逃げる劉表軍、それを追う蜀軍。最早それは戦とは呼べるものではなかった。かろうじて黄忠や蔡瑁が自軍の兵を纏め上げて黄線をしつつ退いていたがそれも束の間の事だった。

張任様と王累様が劉表軍本陣に向かった時、そこには胸を突き刺され死んだ劉表と黄祖、そして自殺したと思われる劉巴様の骸があったらしい。それを見た王累様がすぐさま総大将である劉表が討ち死にしたことを宣言すると、最早これ以上の抵抗は無駄と判断した黄忠と蔡瑁は降伏し、それを切り目に劉表軍は次々と降伏していった。

「・・・それで、どうしてこうなったんでしょうか？」

「・・・？いいから兄様、遊んでよー！」

「あらあら、璃々ったら。」

溜息を吐きながら仕事をする私、その私の膝に乗っかって駄々を捏ねている子供・・・黄忠の娘である璃々、その様子を見ながら微笑んでいる黄忠殿。

・・・どうしてこうなったかは戦後の処理まで遡る。

「で、あなた達は全員蜀に従うとして・・・あなたが黄忠ね？」

「はい。」

劉焉様がそう聞くと、黄忠は頷く。

「お前が・・・！」

「ちよ、劉璋様！？お止めください！-」

ふと劉璋様の方を見ると剣の柄に手をかけ、今にも黄忠に斬りかかりんとしていた。それを見た？賢様が慌てて両脇に手を入れ羽交い絞めにする。

「離してよ？賢！こいつは呂瓊を傷つけたんだよ！？」

手をぶんぶんと振ってまるで駄々をこねる子供のような劉璋様を見て、劉焉様は眉間を揉みながら溜息を吐く。

「全く・・・静音。いい加減にしない、降伏した将を有無も言わずに斬ろうとするなんて言語道断よ？」

「し、しかし母様！」

それでも口を開こうとする劉璋様よりも早く、私が口を開いた。

「・・・劉璋様、私は別に黄忠殿を恨んでなどいませんよ？戦場で怪我は付き物、一々傷を負わされた相手を恨んでいては心が持ちませぬ。それに、劉璋様のそのお気持ちだけで私は十分報われましたから。」

私がそう言っていると、劉璋様は口を噤む。だが、黄忠を睨むのを止めようとはしない。

「・・・黄忠、あなたは武官として有能と聞いていたけど確か文官としての仕事も出来たわよね？」

「？ええ・・・亡き夫の後を継いで街の治安を維持するのに務めましたから多少は出来ますが・・・。」

黄忠の言葉に劉焉様が頷き、私をチラリと横目で見る。

「それじゃ、あなた・・・呂瓊の副官をやりなさい。」

一瞬、場の時間が止まる。先程まで喚いていた劉璋様も劉焉様が何を仰ったのか理解が追いついていないようだ。

「・・・はい？・・・今、何と仰いましたか劉焉様？」

一早く復活した私は、思わず劉焉様に向けて聞き返す。

「だから、黄忠をあなたの副官にするって言ったのだけど？」

「ちょ、ちよつと母様っ!？」

その言葉を理解した劉璋様が抗議するが、全く劉焉様は耳を貸していない。

「黄忠は別に構わないわよね？」

「え、ええ・・・別に構わないですが・・・。」

その言葉を聞いた劉焉様は私の方に笑顔で振り向く。

「呂瓊も利き腕が負傷しているし、元々劉璋のお付きは無理だったでしょう？・・・劉璋よりも弱いしね。」

「・・・。」

見事に胸に突き刺さりそんな事を真正面から言ってくる劉焉様。まあ、事実なので否定できませんが。

「劉巴と黄権がいなくなったから・・・頼れる文官が不足してしまつたわ。だから、呂瓊は劉璋のお付きを解雇して文官兼軍師として専ら働いてもらいます。元々その心算だったし・・・でも、その場合今の状態じゃ仕事に支障が出るでしょう？副官が必要だとは思わない？」

笑顔でそう言い切った劉焉様はどうやら私の副官を黄忠にする気満々のようだ。しばしの沈黙が流れ、私は溜息を吐く。

「・・・はあ、分かりました。何をお考えか知りませんが、確かにこの腕では政務の仕事に支障が出ますからね・・・。」

左腕でジクジクと痛む右腕を摩さする。

「それじゃ、決まりね。」

こうして黄忠は私の右腕が治るまでの間副官として務めることになったのだが。

「あの・・・黄忠殿？」

「はい、何でしょうか呂瓊さん？」

「私の腕は既に完治しましたし・・・そろそろ武官の方へ戻っては？」

そう、2ヶ月が経ち私の右腕は既に完治し終えているのだが・・・未だに黄忠殿は私の副官の任から降りようとしなない。

「あら・・・呂瓊さんはそんなに私の事がお嫌いですか？」

私がそう言つと黄忠殿は袖で顔を覆い隠し、泣き真似を始める。

「いや、そう言つわけではないのですが・・・それと嘘泣きは止めてください。侍女と巖顔様が五月蠅いので。」

「ふふ・・・なら副官を務めてもいいですわよね？」

黄忠殿は、そこらへんの若い男が見れば一目惚れするかのような極上の笑みを浮かべる。

「・・・はあ、分かりましたよ。全く、強情なお方だ・・・。」

私は眉間を揉み、溜息を吐きながら渋々承諾する。

「お誉めに預かり光栄ですわ。それより、私の事は真名で呼んでくださいと何度も言ってるのに・・・。」

副官になって数週間後、黄忠殿は私に真名を授けようとした・・・が、私は頑なに受け取ろうとしないのでほぼ毎日その事を言うてる。

「いや、仕事の最中に真名を呼ぶ必要はないでしょう?」

「・・・信頼関係は大事だと思いますけど?」

しばしの沈黙が場を包むが、黄忠殿が先に溜息を吐く。

「まあ・・・何度言ってもあなたは折れる気はなさそうですが・・・でも、いつか呼ばせて見せますわよ?それじゃ、この書簡を劉焉様に持って行っていくわね。」

「ええ・・・お願いします。」

纏めた書簡を持って黄忠殿は部屋を出て行った。

「・・・とりあえず璃々さん、どいてください。仕事できません。」

「嫌ー。」

笑顔で首を横に振って膝の上からどけようとしないう璃々。私はそんな璃々を見て『・・・黄忠殿の血は間違いなく受け継がれているな』と思い、再び溜息を吐きながら書簡に手を伸ばし再び仕事を始めた。

第十三話（後書き）

元々呂瓊は文官・軍師見習い・劉璋のお付き〓護衛の三つを掛け持ちしてました。

しかし今回より呂瓊が文官兼軍師となり、そして黄忠が呂瓊の副官となりました。代わりに劉璋の護衛を解雇です。

数話平穏な暮らし？を挿んで、黄巾の乱に突入かなあ・・・。

第十四話（前書き）

今回は物凄く短いです。

第十四話

「占い・・・ですか？」

いつも通り政務の仕事をしていると劉璋様がやってきて、そのような事を聞いてきた。

「うん、何かねー都の占い師の・・・えーつと・・・か、かん？管？なんだっけ。それが予言したらしいの。その事についてどう思う？」

劉璋様の話を聞きながら、ふとつい先日街で聞いた占いを思い出す。
確か――

『世が乱れ人民の心も荒れ果てた時、天より落ちし流星に乗って天の御使いが舞い降りる。その者白く輝く衣を纏い、乱世を治めるだろっ』

――
だったような？

「確か、その占い師の名は管輅ですね。私個人の意見としては・・・果てしなくどうでもいいですね。流星に乗って、という時点でおかしいでしょうし。仮にその天の御使いが現れた所で、私には関係ありませんよ。私は蜀を守る、それだけですから。」

「・・・呂瓊ならそう言うと思ったよ。」

そう言って笑う劉璋様。

「・・・しかしながら、近頃賊共がやけに蔓延っているようですね？」

蜀の地では治安維持の為毎日交代制で兵を見回らせていたりするし、被害があつたと報告があればすぐさま討伐隊を組むので被害は軽微で済んでいるがそれでも数が多すぎる。何ヶ月に一度あればいいほうだった蜀ですら、一ヶ月に一度報告を聞くようになっていた。

「あー・・・うん、私や嚴顔・・・それに黄忠で討伐隊を組んでるんだけど何処から湧いてくるのか・・・。」

「・・・。」

顎に手を添え、劉璋様は考え込む。まるで虫の如くいくらでも湧い

てくる賊、しかもそれらは一様に頭に黄色い布を巻いているのと
と。

「何かの象徴・・・でしょうかねえ？」

「え？」

「賊の巻いている布です。皆が皆黄色い布を頭に巻くことは普
通ありませんしね。」

しかし・・・そうなれば異常なほど大きい組織になりますね。何故
今まで見つからなかったのかが不思議なくらい。

「失礼するわね呂瓊。」

扉を叩き、？賢様が顔を覗かせる。

「ここにおられましたか劉璋様、また賊が暴れているとのことであ
・・・敵顔と共に討伐して来いと劉焉様の命令です。」

「うええ・・・またあ・・・？」

凄く嫌そうな顔をしながら、劉璋様は溜息を吐く。

「・・・御武運を、劉璋様。」

「うー・・・呂瓊、行つてきます・・・。」

劉璋様は重い足取りで私の部屋を出て行つた。またしばらくの間賊を討伐する為山を駆けまわることになるのだろう。

「しかし、管輅の予言通りかどうか知りませんが・・・確かに乱れつつありますね。」

私一人しかいなかった部屋の中、一人静かに独白する。
おそらく、中央付近では荒れに荒れている事だろう。帝が鎮座する都だろうと难道ろうと、賊には関係のない事だから。

「まあ、天の御使いというあやふやな存在まで出てくるとは思いませんが・・・もし出てきたとしても、この蜀を乱すような事があれば・・・。」

——この命を以て、殺す事にしましょう。

第十四話（後書き）

次話より黄巾の乱に入りたいと思います。・・・うん、ただ話のネタが思い浮かばなかったんです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7148p/>

望まれぬ『外史』の男

2011年10月8日13時22分発行